口承叙情詩における「変身」

水上則子

「変身」は、各地の神話や文学の中に、さまざまな形や機能を持って登場する表現形式であり、ロシアの口承文芸でも多くの変身が取り扱われているが、その意味するところは決して同一ではなく、「姿を変える」という内容を持っている場合のほかに、「変身」という形式をとった比喩である場合、あるいは、その両方の要素を持っている場合などがある。ここでは、口承叙情詩の中における、変身と比喩との関係を考えてみたい。

B.H.エリョーミナは、「ロシア民衆叙情詩の詩的構造」(1)の中で、口承叙情詩における変身を次のように分類して、それぞれが、神話が次第に比喩へと転化していく段階を表していると述べている。

（1）完全な変身：完全に信じられている。当り前のこととして行われ、理由づけもなされない。

（2）不完全な変身：信仰がやや揺らいだ状態。変身そのものは信じられているが、理由づけが行われる。

（3）信じられていない変身：姿が変わるということは全く信じられていない。理由づけはなされているが、こじつけに近くなる。

（4）完全な比喩：形の上では「変身」であるが、内容は全く失っている。

エリョーミナは、これらの段階にいくつかの口承詩をあてはめて例としているが、そのあげられた例を見る限りでは、「信じられている」変身と「信じられていない」変身という区別は、「信じる」のは誰なのか、つまり、作り手なのか、その当時の聞き手なのか、現代の読者なのか、著者自身なのか、それとも以上の全員なのか、などとという点が明確にされていないこともあって、かなり恣意的なものになってしまっている。また、「理由づけ」の有無も、それほど単純に分類の指標となりうるとは思えない。

「変身」という表現について考えるとき、それがどのような内容を持っているのかを知るためには、「変身」が、その口承詩の中で、重要な役割を果たしているか否かという点に注目するのが最も確実なのではないだろうか。この点から叙情詩の中の変身を分類するならば、次のようになる。

（A）実質的な変身：誰かが「変身」することがストーリーを展開させる役割を果たしている場合。

（B）願望・想像としての変身：「変身」は、中心的な役割を果たしているが、主として、姿を変えたいという願いや、姿を変えたらどうなるだろうか、という想像を表現する手段であって、「変身」に実体がな

くともストーリーは成立する場合。

（C）変身の形をした比喩：上の（4）に同じ。筋にはまったく影響しない。

以下、エリョーミナが例としてあげたものも利用しながら、いくつかの作品について、その変身の内容を考えてみたい。

例1：姑が嫁を憎んで木に変え、息子はそれと気づかずに妻＝木を切ってしまう、という筋を持つ口承詩。

1－a）Уж ты зла лиха свекровоцька неласкова,
Не давала снохи она не жить, не быть;
Не давала снохи она не ись, не пить;
Как случилось молоццу да полё ехати,
Как во ту во дорожкою во дальнюю,
Да во дальную дорожку незнакомую;
Как во то-де времё, во ту пору,
А как зла лиха свекровушка неласкова,
Овернула ей сноху теперь березонькёй,
Прутья-лисья у березки позолочена[2].
・・・・

なんと冷たく邪悪な姑か、
嫁に生きた心地も無くさせるとは、
嫁に飲み食いもさせないとは、
若者が、遠い野原を、
遠くの道を、遠くの国を、
旅することになったとき、
まさにそのとき、その原で、
冷たく邪悪な姑が、
嫁を白樺に変えてしまった、
枝も葉も金色の白樺に。

エリョーミナが、「完全な変身」の例としてあげている口承詩も、これとよく似た内容を持っている。

1－b）・・・・
"Ты поди, моя невестка, во чисто поле;
Ты стань, моя невестка, меж трех дорог,
Четырех сторон,

Ты рябиною кудрявою,
Кудрявою, кучерявою!"
・・・・
Он раз вдарил, она охнула,
Другой вдарил, она молвила:
"Не рябинушку секешь,
Секешь свою молоду жену!
А что веточки--то наши деточки!"(3)
・・・・

「嫁よ、おまえは野原へ行くがいい、
三本の道の間に、
四つの国の間にお立ち、
よく茂ったナナカマドとなって、
よく茂った葉をつけて！」

ひと斧振るえば、おおとため息をつき、
さらに打てば、口をきいた：
「ナナカマドを切っているのじゃなく、
切っているのは自分の女房なのに、
枝と見えるのは子供たちなのに！」

例２：他国へ嫁いで苦労した娘が、鳥に姿を変えて家へ戻ってくるが、兄弟に撃ち殺されそうになる。

２－ａ）・・・・
Текут-текут слезоньки по белу лицу,
Утираю слезоньки белыим платком.
Не буду я к матушке ровно три года;
На четвертом годике -- пташкой полечу,
Горькою я пташечкой-кукушечкою;
Сяду я у матушки в зеленом саду,
На любиму яблоньку -- на матушкину.
・・・・
Большая невестушка возговорила:
"Что за пташечка, пойдем поглядим!"
Средняя невестушка: "Пойдем изловим!"
А малый-то братец: "Пойдем застрелим!"
Жена ему молвила: "Пташечки не бей,
Пташечка-кукушечка -- сестрица твоя,

Прилетела, горькая, с чужой стороны,
Со чужой сторонушки из лихой семьи!"
"Али ты безумная? Сестрица моя
Белая, румяная, всегда весела,
А эта хозяюшка худа и бледна!"
"Оттого худа-бледна -- в чужой стороне,
На чужой сторонушке -- плохое житье!"(4)

白い顔に涙がとめどなく流れる、
白いプラトークで顔を拭おう、
母さんのところへは、三年は行けないだろう、
四年目になったら、鳥になって飛んで行こう、
悲しいかっこう鳥になって。
母さんの家の、緑の庭に止まろう、
母さんの好きな、りんごの木に止まろう。

一番上の兄嫁は言った、
「何の鳥かしら、行って見てみましょう！」
次の兄嫁は言った、「行って捕えましょう！」
弟は言った、、「行って撃ち落とそう！」
弟の妻が言った、「鳥を撃ってはだめ、
このかっこう鳥はあなたの姉さんよ、
気の毒な姉さんがよその国から飛んできたのよ、
よその国から、つらい家庭から！」
「そんな馬鹿なことがあるものか、姉さんは
色白で、頬は赤く、いつも陽気だった、
このおばさんはやせて青白いじゃないか！」
「やせて青白いのは、よその国で、
よその国で、ひどい暮しをしたからよ！」

また、これによく似た口承詩を、エリョーミナは「想像と現実との境界が曖昧な変身」の例としてあげているが、こちらでは、娘＝鳥は、見分けてもらえず、殺されてしまう。

b) Рассержусь на матушку, в гости не пойду,
На седьмое летечко пташкой полечу...
Увидала матушка из окошечка:
"Что это за пташечка во саду поет,
Где эта прилетная причеты берет?"
Первый братец говорит--"пойду, погляжу".

Второй братец говорит--"ружье снаряжу".
Снарядили ружье--и убили пташечку,
В зеленом саду,
Серую кукушечку, милую сестру[5].

母さんに腹をたてて、お客には行かないで、
七年たったら鳥になって飛んで行こう、
母さんが窓の外を見た：
「庭で鳴いているのはいったい何という鳥だろう、
この渡り鳥はどこで泣き歌を習うのだろう？」
上の兄が言う、「行ってみましょう」。
下の兄が言う、「銃に弾丸を込めましょう」。
彼らは銃に弾丸を込め、鳥を殺してしまった、
緑の庭で、
灰色のかっこうを、愛しい妹を。

例３：逢い引きの翌日、恋人／ハトは朝早く「飛び去って」しまう。残された方は後を追う（が、恋人／ハトが死んでいるのを発見する）。

３－ａ）Вечор поздно было у нас ввечеру
Да ли голубушка во гостях у нас была.
Голубушка во гостях у нас была,
Да ли сладку водочку с винцом она пила.
Сладку водочку с винцом она пила,
Да ли с водки пьяна-веселешенька была.
С водки пьяна-веселешенька была...
Да ли не помню, как млада домой дошла.
Я не помню, как млада домой дошла,
Да ли голубочку постель мягку постлала.
Голубочку постель мягку постлала,
Да ли я на право крылышко к нему легла.
Я на право крылышко к нему легла,
Да ли сверху левым рассизеньким обняла
Сверху левым рассизеньким обняла,
Да ли, приобнявши, принаказывала,--
Приобнявши, принаказывала:
"Да не спи ты, голубь, не проспи, голубь, меня
Не спи, голубь, не проспи, голубь, меня..."
Да ли улетела, ох, голубушка чуть свет.
улетела, ох, голубушка чуть свет,--

Да ли взвился голубь за голубушкой вослед[6].

夜遅く、わが家には、
雌バト／恋人がお客に来ていた。
甘いウォトカを瓶から飲んだ、
ウォトカを飲んで、酔って陽気になった、
私は覚えていない、どうやって家へかえったのか、
雄バト／恋人に柔らかい床を敷き、
私は右の翼の上に添い寝した、
灰色の左の翼で上から包んだ、
包みながらこんな風に言った。
「雄バト／恋人よ、眠らないで、
寝過ごして私を見失わないで．．．」
夜が明けるやいなや雌バト／恋人は飛び立っていった、
雄バト／恋人も舞い上がった、雌バトのあとを追って。

3－b）Вечером позднешенько голубка была,
Мягкую постелюшку подружка стлала,
На правое крылышко спать она легла,
Сама левым крылышком дружка обняла.
Обнявши, голубушка наказывала:
"Спи-ка, спи-ка, голубь, меня не проспи,
Вставай рано, рано утром до зари,
От напрасной смертоньки меня ослободи!"
Встрепенулся голубь рано на заре:
Нет голубушки на правом на крыле!
Взвился, взвился голубь сизой, полетел.
Вокруг гору сизой облетел.
За этой за горушкой голубка лежит,
По подбережку пух ее развит.
"Знаю, знаю, ведаю, кто ее убил,
Убил ее молодец из красна окна,
Из красна окна, из косящата!"[7]

夜更けに雌バト／恋人がいた、
恋人は柔らかい床を敷き、
右の翼の上に寝て、
左の翼で恋人を包んだ。
そして雌バトはこう言った：
「おやすみ、おやすみ、雄バト／恋人よ、

朝は早くお起きなさい、夜明けの前に、
虚しい死から私を救うために！」
雄バトは夜明けに目を覚まして羽ばたきをした、
右の翼の上に雌バトの姿はなかった！
灰色の雄バトは舞い上がり、飛んでいった。
灰色の鳩は山のまわりを飛び回った。
その山の後ろに雌バトは横たわっている、
北西の風の下で綿毛がほどかれている。
「知っているとも、よくわかっている、誰が彼女を殺したのか、
彼女を殺したのは赤い窓の中にいた若者だ、
赤い、側柱のある窓の中にいた若者だ！」

例４：エリョーミナが「完全な比喩」の例としてあげているもの。

４）Вдоль улицы в конец
Тут и шел молодец.
Соколом пролетел.
Соловьем просвистал[8].

道づたいに、村はずれへと
若者が歩いていた。
鷹が飛ぶように、誇り高く、
ナイチンゲールのように口笛を鳴らして。

例５：「不幸」＝ゴーレが、様々なものに姿を変えて、逃げる主人公をどこまでも追いかけてくる、というもの。

５）・・・・
Я от горя во чисто поле,
И тут горе -- сизым голубем!
Охти горе, тоска-печаль,
Тоска-печаль великая!
Я от горя во темны леса,--
И тут горе -- соловьем летит!
Охти горе, тоска-печаль,
Тоска-печаль великая!
Я от горя на сине море,--
И тут горе -- серой утицей[9]!
・・・・

わたしはゴーレから逃げる、清い野原へと、
ここにもゴーレはいるーー灰色の鳩の姿で！
おお、ゴーレよ、愁いと悲しみよ、
大いなる愁いと悲しみよ！
わたしはゴーレから逃げる、暗い森へと、
ここにもゴーレはいるーー鷲の姿で飛んでいる！
おお、ゴーレよ、愁いと悲しみよ、
大いなる愁いと悲しみよ、
わたしはゴーレから逃げる、青い海へと、
ここにもゴーレはいるーー灰色の鴨の姿で！

例６：エリョーミナが、「理由づけのある変身」の例としてあげているもの。

６）Ко любавину двору
Добрым молодцем иду,
Через черную грязь--
Серым журавлем.
Через быструю речку--
Ясным соколом.
Дома ли, любава,
Дома ль, душечка моя(10)？

恋人の家へは
若者の姿で行こう、
黒い泥の上を通るには、
灰色の鶴になって。
速き川を渡るには
りりしい鷹となって。
恋人よ、家にいるかい、
かわいい人よ、家にいるかい？

例１は、ａ・ｂとも、妻が人間の姿を失い、木の姿で立っていたために、夫は彼女を見分けられず、斬ってしまう、という筋なので、この変身が実体を伴っていなかったならば物語は成立しない。しかし、ａでは夫は、自分が切ったのが妻であったことに帰宅するまで気づかないところから、彼女は切られ（殺され）ても白樺のままであったと思われるが、ｂで、妻＝ナナカマドが、斧を受けながら自分の正体を語っているのは、

切られ（命を奪われ）たことで人間に戻ったことを意味すると考えられる。

例２の変身は、「鳥になって飛んで行きたい」「自分が鳥になったらどんなことが起こるだろうか」という願望・想像から生まれたものである。ａでは、弟や兄嫁たちが娘＝かっこうを見分けることができないのは、鳥の姿をしているからであるとも、他国の婿家での生活の苦労のためにやつれたせいであるともとれる。（他国の婿家で苦労したためにやつれてしまい、母親に会っても自分と判ってもらえない、という口承詩も存在する[11]。）前者とすれば、娘は鳥になって家へ帰ってきて、弟の妻に見分けてもらったところで人間の姿に戻ったことになり、後者とすれば、「かっこうになって家へ帰る」という表現は、「かっこうのように」家へ帰る、という比喩であることになる。どちらの解釈も同じように可能だが、もしこれを比喩でないと考えるならば、この「変身」と「人間に戻ること」との関係は、例１－ｂの場合とよく似ていることがわかる。２－ｂも、状況に分かりにくさはあるものの、ａとほぼ同じように解釈してよいであろう。

例３－ａでは、「変身」はほとんどその実体を失っている。３－ａとｂとは、途中まではほとんど同じ内容なのであるが、ｂにはａにないモチーフがあるために、変身の意味もやや違ったものになっている。まずａについて見てみると、голубь, голубка という語の解釈にも、ほとんど問題はない。この語には、「ハト」と「いとしい人」の両方の意味があるが、ここでは「恋人」の意であることは明白である。一方、１２行目には "крылышко" という語があり、２０行目の "улетела"、２２行目の "взвился"も、いずれも鳥の動作を表す語なので、主語は、文字どおりにとれば、「ハト」でなければならないかのようであるが、これは、恋人たちが鳩に変身したことを意味するのではなく、「動詞によるメタファー」、あるいは、「述語的なメタファー」[1.2]と呼ばれる比喩の一形態であり、голубь, голубка という語の意味の二重性を、イメージをふくらませるために最大限に利用しているのだと考えられる。したがって、３－ａの中の「変身」は、ほぼ完全な比喩であると結論することができる。

一方、３－ｂはａよりも少し複雑である。１～１６行目は、ａと同じように解釈できるが、１７行目以降は、単純な比喩とは言えない。これだけを見るならば、例２のｂのような、「想像の中の変身」とも解釈できるし、比喩が展開されている、あるいは実体化されていると考えることも可能であるが、次のような口承詩を合わせて読めば、その意味するところは明白になる。

"Ах, что ж ты, голубчик, не весёл сидишь,
Не весёл сидишь и не радостен?"

"Уж как мне, голубчику, веселому быть,
Весёлому быть и радостному? --
Вечор у меня голубка была,
Со мной сидела,
Со мной сидела, пшено клевала,
Поутру голубка убита лежит,
Убита лежит, застреленная,
Застреленная, потерянная.
Потерял голубку боярской слуга,
Боярской слуга, с боярска двора,
С боярска двора, убил из ружья".

"Ах, что ж ты, молодчик, не весёл сидишь,
Не весёл сидишь и не радостен?"
"Уж как мне, молодчику, весёлому быть,
Весёлому быть и радостному? --
Вечор у меня девица была,
Девица была, со мной сидела,
Со мной сидела, мед, пиво пила,
Мед, пиво пила, речь говорила,
<Речь говорила> и руку дала,
И руку дала идти за меня,
А нынче девицу замуж отдают,
Замуж отдают, просватывают(13).
・・・・

「ハトよ、どうして陰気にしているのか、
陰気に、悲しげに？」
「どうして陽気になれるものか、
陽気に、楽しくなどなれるものか、
夜には雌バトが来ていて、
私と一緒にいて、
一緒にキビをついばんでいたのに、
朝、雌バトは殺されていた、
撃たれ、殺されていた、
撃ち落とされ、殺されていた、
雌バトを殺したのは貴族の従僕だ、
貴族の従僕が、貴族の屋敷から、
貴族の屋敷から、銃を撃って殺したのだ。」

「若者よ、どうして陰気にしているのか、
陰気に、悲しげに？」
「どうして陽気になれるものか、
陽気に、楽しくなどなれるものか、
夜には娘が来ていたのに、
娘が私と一緒にいたのに、
私と一緒にいて、蜜やビールを飲んだのに、
蜜やビールを飲んで、話をしたのに、
話をして、承諾してくれたのに、
私についてくることを承諾してくれたのに、
今彼女は嫁に行かされてしまう、
嫁に行かされてしまう、親が決めてしまう。

ここにあるのは、雌バトを撃ち殺されて悲しんでいる雄バトと、恋人が他人に嫁ぐことを悲しんでいる若者とのパラレリズムである。これをあてはめれば、３－ｂで殺されている雌バトは、他の男に嫁がされる娘の比喩表現であると考えられる。従って、３－ｂも、全体として比喩であるということができる。

例４は、エリョーミナが「完全な比喩」の例としてあげているものである。ここでは、形の上では変身と同じである「造格による比喩」が用いられているが、「変身」という内容は明らかに欠けている。

例５は、一見、魔法民話における「変身を伴う逃走」に類似している。民話の「逃走」には、変身を伴うものが多くあり、その変身にも、連続的なもの（逃走者が馬になって逃げる－追跡者が狼になって追う－馬がすずきになる－狼がかますになる、など）と、単発的なもの（追跡者に追いつかれそうになると、逃走者は井戸や教会に変身してその目をごまかす、など）とがあるが、例５は、形の上では、追跡者ゴーレが連続的に姿を変えているように感じられる。

しかし、これは、変身とは言えない。なぜならば、ここには、ゴーレが、もともとどのような姿をしているものであるのかについての記述が何もないからである。これに類似した内容の追跡のモチーフを持つ口承詩は、ほかにも数編知られている(14)が、いずれもゴーレの姿についての具体的な記述を欠いている。逆に、ゴーレがどのような姿をしているのかについて描写している、言い替えれば、ゴーレがはっきりと擬人化されている口承詩においては、ゴーレの「追跡」は次のような形になっている。

・・・・

Уж я от горя в зелены луга --
Горе за мной с серпом бежит:
"Выжну, выжну зелены луга,

Сыщу-найду красну девицу!"

Уж я от горя во темны леса --
Горе за мной с топором бежит:
"Вырублю, вырублю я темны леса,
Сыщу-найду красну девицу[15]!"
・・・・

わたしが緑の草原へ逃げても
ゴーレは鎌を持って追いかけてくる
「緑の草原をすっかり刈ってやる、
きれいな娘を見つけ出してやる！」

わたしが暗い森へ逃げても
ゴーレは斧を持って追いかけてくる
「暗い森を切ってやる、
きれいな娘を見つけ出してやる！」

はっきりした輪郭をもった形象ではないrope＝不幸、心の苦しみというものが、野原へ行けば鳩の姿と重なって見え、森へ行けば鷲の姿に重なって見えるという表現は、まさに「完全な比喩」なのである。

例６は、エリョーミナによれば、「理由づけがあることが比喩となるのを妨げている」変身の例である。エリョーミナの「理由づけ」とは、「泥を渡るには長くて細い足で（灰色の鶴となって）歩くほうがより便利であるし、川を渡るには（りりしい鷹となって）、速く、しかも服を濡らさずに渡れた方がよい。」[16]というものであるが、私には、この変身を比喩とすることには何の問題もないように思われる。強いて言うならば、「川を越えるときには鷹になりたいものだ」というような「願望」の要素は認められる。しかし、全体としては、これは、「恋人の家へ行くときには、どんな障害も容易に乗り越えられる」ということを表現している比喩と考えるべきであろう。

以上のように、いくつかの叙情詩を分析してみたが、１－ａ・ｂを除くすべての作品が、完全に比喩であるものから、比喩という解釈も許容するというものまで、程度の差はあるものの、比喩と切り離して考えることのできないものであり、これは、おそらく、口承叙情詩全般において、「変身」の中では比喩が優勢であることを物語っていると思われる。

一方、１－ａ・ｂと、２－ａ・ｂでは、「変身」は、「親しい人に自分だということがわかってもらえない」という結果を伴っており、力点がおかれているのは、変身自体ではなく、むしろこの結果のほうであり、この結果が引き起こす悲劇の方であるとも考えられる。つまり、「変身」

それ自体を重要な道具立てのひとつとしている魔法民話などは
比喩の一つの形式として、あるいはテーマとなるべき悲劇を導入す
段の一つとしてのみ変身を扱うというところに、口承叙情詩の特徴があ
るのではないかと考えるのである。

(1) Еремина, В.И. Поэтический строй русской народной лирики. 1978.
(2) "Горе". Повесть о Горе-Злочастии. 1984.所収、p73
(3) (1)書、p28
(4) Русская народная поэзия. лирическая поэзия. 1984. №289
(5) (1)書、p29
(6) (4)書、№249
(7) 同前、№255
(8) (1)書、p32
(9) (2)書、p71
(10) (1)書、p31
(11) (4)書の№290などが例である。
(12) (1)書、p49
(13) (4)書、№268
(14) (2)書、p41～77参照。
(15) (4)書、№221
(16) (1)書、p31